毎日新聞　コラム「三重～る経済」
掲載美　　2023年4月11日(火)
タイトル　「我が家のエッグショック」
執筆　　百五総合研究所　慶徳亘紀

我が家は、休日の朝食に目玉焼き2個が定番である。しかし、目の前には1個だけ。妻に聴くと、スーパーで卵が売り切れだったので、今日は1個にしたとのこと。スーパーに行ってみると、確かに残り少なく、「家族1パック限り」という表示。1年前は特売だと10個100円で買えたが、今は300円前後に跳ね上がっている。卵は貴重な存在になった。

卵の価格上昇に伴い、大手ファミリーレストランでは、卵のメニューを制限し、食品メーカーでは、卵を原材料とするマヨネーズなどの値上げも相次いでいる。

価格上昇の背景には、鶏のエサとなる配合飼料の価格高騰と、鳥インフルエンザ感染による生産量の減少がある。配合飼料の原材料となるトウモロコシなど穀物価格が、国際的な需要の増加やウクライナ情勢により高騰していることに加え、円安も影響している。

鳥インフルエンザは、今シーズン、三重県内での発生はないものの、26道県で82事例(2023年3月28日現在)と多発し、約1701万羽が殺処分の対象となった。これは全国の採卵鶏飼養羽数の約1割に相当する。

殺処分となった羽数を補うために採卵鶏の餌付けも順次始まっているが、ヒナから卵を産むまでに成育するには約6カ月必要で、生産量の回復は、まだまだ先になりそうだ。

ちなみに、総務省の家計調査(2人以上の世帯)「品目別都道府県庁所在地および政令指定都市ランキング(52市区)」によると、卵の1世帯当たりの年間消費量は、全国が約32・9㌔であるのに対し、津市は約35・3㌔(12位)と、約2・4㌔上回り、卵を好んで食べる世帯が多いことがうかがわれる。

卵は長年物価の優等生と言われてきた。スーパーの卵売り場での数量制限も無く、価格も落ち着いて買える日を、多くの人が望んでいることだろう。我が家でも、気兼ねなく目玉焼きが2個に戻る日が待ち遠しい。